

村上春樹 1 「風の歌を聴け」について

世界が人と人との間で共有されているという大前提が、村上春樹の世界では揺らいでいる。世界を共有することの困難が至るところに感じられる。

p 28 「小さい頃、僕はひどく無口な少年だった。」

p 30 「もし何かを表現できないなら、それは存在しないのも同じだ。いいかい、ゼロだ。」

あまりに「無口」であったために両親は「ぼく」を「知りあいの精神科医の家」に通わせた。「ぼく」と「精神科医」が対話する場面には、話すことにより共有された世界に参加することの困難と、これに向き合う、共有された世界に参加することへの強迫があるように思われる。この強迫に対して、「ぼく」は「考える振りをして首をグルグルと回した」りして抵抗するのだ。これが、この作品の主人公の基本的な人物像を表す。

その後、彼はある時期に異常に饒舌になり、発熱し、普通の少年になるのだが、共有された世界へ参加することの難しさと、強迫＝抵抗 という局面はそのまま人物像として維持されることになる。

ただし共有の困難という要素は、「ぼく」の意識的な哲学的な懐疑の結果ではない。彼の本質的な性質と考えた方がよい。

p 10 「必要なものは感性ではなく、<ruby>ものさし</ruby>……</ruby>だ。」

p 96 「その時期、僕はそんな風に全てを数値に置き換えることによって他人に何かを伝えられるかもしれないと真剣に考えていた。そして他人に伝える何かがある限り僕は確実に存在しているはずだと。」

「ぼく」が自分の「レーゾン・デートゥル」を確認しようとして全てを数値化しようとしたのは、直接的には「人間の<ruby>存在理由</ruby>レーゾン・デートゥル</ruby>をテーマにした短い小説を書こうとした」ことが理由だったが、彼がそうせずにはいられなかったのには、別に二つの理由がある。

一つは、数値化して自分の存在理由を明確化することにより、自分自身を「私たちの世界」の上で確認しなければならない、という強迫観念が彼自身の中にあっただからであり、もう一つはそういう手段に訴えなければ、自分を「私たちの世界」の上で容易に確認することができない「ぼく」がここにいたからである。つまり、「ぼく」にとっては、言葉を介して人々と世界を共有するということが、少しも自明のことではないのである。

「ぼく」の人物像とは別に、言葉に対する強い懐疑も散見する。そしてこの懐疑は、言葉を介して立ちあがる意味世界全体の揺らぎと繋がっている。

p 7 「僕に書くことのできる領域はあまりにも限られたものだった」

p 12 「僕たちが認識しようと努めるものと、実際に認識するものの間には深い淵が横たわっている。」

p 91 『「じゃあ、意味なんてないじゃない？」 / 「意味？」 / 「歯まで折られた意味よ。」 / 「ないさ。」と僕は言った。』

「ぼく」が参与できない世界の側で、他者はどうしているだろうか。ここに他者から「ぼく」が受ける拒絶のイメージがある。

p70「最後の一人は何故だかはわからないが僕に向かって、お前となんかは口もききたくない、と言って電話を切った。」

p77『机の上には書き置きたいノートの切れ端があり、そこにはたった一言、「嫌な奴」と記されていた。恐らく僕のことなのだろう。』

共有された世界のおぞましさ、のイメージがある。

p85「私の正義はあまりにあまねきため、というところがなんともいえず良い。」

これらの不愉快なイメージ群は一様に、「ぼく」が「私たちの世界」との間に距離を保たなければいけない、その世界に手を差し伸べることが難しいという、困難さがもたらしたものである。

p113「高校の終り頃、僕は心に思うことの半分しか口に出すまいと決心した。理由は忘れたがその思いつきを、何年かにわたって僕は実行した。そしてある日、僕は自分が思っていることの半分しか語ることでできない人間になっていることを発見した。」

言葉を巡る表現への強迫と抵抗は裏腹だ。そしてこの言葉との関わり方は、自分の生がどこにあるか、他者と何が共有できるのかというテーマと常に重なっている。

p41『「どんな仕事？」/「あなたに関係ないわ」/そのとおりだった。』

p43『「誓うよ。」/「信じられないわ。」/「信じるしかないさ。」僕はそう言った。そして嫌な気持ちになった。』

誰かが自分の目の前にいる時、「ぼく」は自分の内面的な葛藤が顕在化することに気づく。それはいつも、他者と生を共有できないという直感と同時に、そのことから生じる孤独感の引き受け＝諦念、語ることへの強迫＝抵抗、語ることへの希望、などといった揺らぎとして立ち現れるのである。

希望、と書いたが、この作品は「小説」という微かな希望を始めから持たされいるのではないか。

p8「文章を書くことは自己療養の手段ではなく、自己療養へのささやかな試みにしか過ぎない」

「ささやかな試みにしか過ぎない」のは、表現すること自体が、既に他者との世界の共有を前提とするからだ。表現者は、「あなた」の前に立つ明白に限定された「私」にならなければならない。しかし、「ぼく」にとってはこの前提の部分が既に弱いのだ。「ぼく」は明白な主体である「私」になりきれない。他者と生の場を共有していない、できないという直感が「ぼく」の生を支配しているので、「書くこと」への信頼が保てないのである。信頼できない行為を「手段」として確定的に言うことはできない。

このことは「書くこと」だけに生じているのではない。「ぼく」のするすべての会話、全ての行動が、この不安に冒されている。

p69『「ベートーベン、ピアノ協奏曲第3番、グレン・グールド、レナード・バーンステイン。ム……聴いたことないね。あんたは？」/「ないよ。」/「ともかくありがとう。はっきり言って、と

でも嬉しいよ。」』

p 93 『「ねえ、信じてもいいわよ。」 / 「何を？」 / 「あなたがこの間、私に何もしなかったことよ。」 / 「何故そう思う？」 / 「聞きたい？」 / 「いや。」と僕は言った。 / 「そう言うと思ったわ。」』

p 101 「彼女は14歳で、それが彼女の21年の人生の中で一番美しい瞬間だった。そしてそれは突然に消え去ってしまった、としか僕には思えない。どういった理由で、そしてどういった目的でそんなことが起こり得るのか、僕にはわからない。誰にもわからない。」

p 102 「何故彼女が死んだのかは誰にもわからない。彼女自身にわかっていたのかどうかさえ怪しいものだ、と僕は思う。」

自殺の理由など分からない、という部分はステレオタイプなイメージにしか過ぎないが、「ぼく」と「鼠」との会話や「ぼく」と「左手に指が4本しかない」少女との会話のすれ違うようなやりとりが物語るのは、「ぼく」の世界が周囲の他者との間で共有されている世界から、意味を汲み取ったり、また意味を投げ返すということを、充分にしていないということだ。

さて、「書くこと」にもう一度戻ろう。

「ぼく」の立ち位置は、「私たちの世界」から一步退いたところにあると考えて良い。

p 109 「街にはいろんな人間が住んでいる。僕は18年間、そこで実に多くを学んだ。街は僕の心にしっかりと根を下ろし、思い出のほとんどはそこに結びついている。しかし大学に入った春にこの街を離れた時、僕は心の底からホッとした。」

しかし、彼の親友である「鼠」は、彼の分身のようであり、「ぼく」とは異なる方向性を持つようだ。

p 117 『「自分と同じくらいに他人のことも考えたし、おかげでお巡りにも殴られた。けどさ、時が来ればみんな自分の持ち場に結局は戻っていく。俺だけは戻る場所がなかったんだ。」』

彼は「鼠」という名のない名前を持たされていることから、恐らくまずは「ぼく」の分身と考えて良い。彼は「古墳」を前にした時に、不思議な生命の一体感を感じ取る。

p 119 『「その時に俺が感じた気持ちはね、とても言葉じゃ言えない。いや、気持ちなんてものじゃないね。まるですっぽりと包み込まれちゃうような感覚さ。つまりね、蝉や蛙や蜘蛛や風、みんなが一体になって宇宙を流れていくんだ。」』

『「文章を書くたびにね、俺はその夏の午後と木の生い繁った古墳を思い出すんだ。そしてこう思う。蝉や蛙や蜘蛛や、そして夏草や風のために何か書けたらどんなに素敵だろうってね。」』

この一体感は、彼が「わたくし」だけの孤独な、幻想世界を生きた瞬間を言い当てている。そしてこの実感を彼は信じているのだ。「わたくし」にとって真実の生だ、と信じているのだ。この信じていることだけを彼が書きたい。書くことによって、自分の孤独な世界を共有世界の上に乗せてやりたい、そうすることで自分の孤独が癒されるように思えるし、自分の生に意味が付与されるように思えるのだ。

文章 = 小説を「鼠」は書き始める。小説を書くことは、自分の孤独を共有世界に投げかけることだ。何よりも孤独である何かを、誰かと共有すること、それが可能だということ、そうい

う祈りなしに「書くこと」が始まることはない。「鼠」と共に「ぼく」も書き始めるのだ。この「風の歌を聴け」という作品を書いているのは「ぼく」である。ここに、「書くこと」の可能性にまつわるいくつかのイメージがある。

p 149「突にいろんな人がそれぞれに生きてたんだ、と僕は思った。そんな風を感じたのは初めてだった。そう思うとね、急に涙が出てきた。泣いたのは本当に久しぶりだった。」

p 151『「そう……。いろんな人間が死んだものね。でもみんな兄弟さ。」』

p 160『「宇宙の複雑さに比べれば」とハートフィールドは言っている。「この我々の世界などミミズの脳味噌のようなものだ。」/「そうであってほしい、と僕も願っている。」

つまり、「ぼく」が生きている世界の、「ぼく」の生の何かが、言葉に変換できる、何かが誰かと共有できる、ということが願われて初めて「書くこと」が可能になるのだ。「鼠」は小説を書き続ける。そして「ぼく」は結婚して、やはり語り始める。「ぼく」の場合は、「芸術や文学」を試みているわけではない。「まん中に線が一本だけ引かれた一冊のただのノートだ」 p 12
p 154「幸せか？ と訊かれれば、だろうね、と答えるしかない。夢とは結局そういったものだからだ。」

この曖昧さは、韜晦ではない。また単なるニヒリズムでもない。幸福の所在を、村上春樹は知っているのである。

p 9「彼ハートフィールドには最後まで自分の闘う相手の姿を明確に捉えることはできなかった。結局のところ、不毛であるということはそういったものなのだ。」

p 153「あらゆるものは通りすぎる。誰にもそれを捉えることはできない。/僕たちはそんな風にして生きている。」

生というものを「通りすぎる」ものとしてのみ描くとしたならば、それはあまりに「不毛」だと言わねばならない。

p 127『「君が井戸を抜ける間に約15億年という歳月が流れた。君たちの諺にあるように、光陰矢の如しさ。君の抜けてきた井戸は時の歪みに沿って掘られているんだ。つまり我々は時の間を彷徨っているわけさ。宇宙の創生から死までをね。だから我々には生もなければ死もない。風だ。/「ひとつ質問していいかい？」/「喜んで。」/「君は何を学んだ？」/大気が微かに揺れ、風が笑った。そして永遠の静寂が火星の地表を被った。若者はポケットから拳銃を取り出し、銃口をこめかみにつけ、そっと引き金を引いた。』

「風の歌」を聴くこと、そこに意味を見出すこと、何かが学べれば、生きられるのだ。

p 147「私がこの三年間にベッドの上で学んだことは、どんなに惨めなことでも人は何かを学べるし、だからこそ少しずつでも生き続けることができるのだということです。」

「ハートフィールド」は、何が学べたかについて答えることができなかった。そして「ぼく」の彼女は「天啓」を受け取ることが出来なかった。しかし病床で過ごす少女は、勇敢に意味を発見し続けている。意味を見出せないことから身を引き剥がすこと、生と世界を他者と共有するということには、そのような意味もあるのだ。

揺れている。作品はボーダーを激しく行き来しながら揺れているようだ。

安易な共有世界への回帰 = 予定調和は慎重に避けられている。死も避けている。

作品が収斂するのは希望だろうか。「書くこと」への希望だろうか。